



辺境貴族の
のんびり三男は
魔道具作って自由暮らします ②

YAKO YUKIZUKI

著 **雪月夜狐** ill **saraki**

CHARACTERS

ゼッド

王国の技術部門に所属する魔道技師。寡黙で責任感が強い。

ガルド

アーヴェルト村の鍛冶師。大斧使いの武闘派で、面倒見のいい兄貴肌。

ユリウス

アルヴィス村の鍛冶師。冷静沈着な性格で、戦闘もこなせる。

エルヴィン

本作の主人公。元はしがないエンジニアだったが、辺境貴族シュトラウス家の三男に転生した。前世からの想いでモノ作りに情熱を燃やす。

セシリア

美しく気高いカレドリア王国の王女。誰よりも愛国心がある。

リリイ

エルヴィンの妹。天真爛漫で兄のことが大好き。

カール

エルヴィンの父。

エレナ

エルヴィンの母。

王国からの招待！ 魔道具が繋ぐ未来

どこにでもいる平凡なエンジニアだった僕——渡辺悠一は、辺境貴族のシュトラウス家の三男エルヴィン・シュトラウスとして異世界転生した。

——もつと自由に、好きなものを作りたい。誰かの役に立つ発明を作りたい。

そんな志を持っていた僕は、転生後、魔法と技術を融合させた『魔道具』の製作に励み始めた。そして、妹のリリイをはじめとする家族のために魔道具を作り、王都アルヴェインにあるカレドリア学院に入学してからは、仲間たちと勉強や研究の日々を過ごした。ついには、王宮で魔道具の披露に成功し、僕の魔道具が多くの人に認められることとなった。

学院が春休みに入り、僕は辺境に住む家族のもとへ帰省していた。そして休みも半ばを過ぎた頃、屋敷に王宮の使者が再びやってきた。

カレドリア王宮直属の特別調査局に属する青年も同行しており、王宮からの魔道具製作の依頼として、僕に来訪の要請が正式に届いたのだ。

僕は王宮からの荣誉ある依頼を受けて、人々のためになる魔道具作りに努める決心をしていた。

「エルヴィン様、ご準備はいかがですか？」

調査局の青年は、落ち着いた口調でそう尋ねた。

「ええ、整っています……王宮に招かれるなんて、ちょっと緊張しますけど」

礼服の襟元を軽く正しながら、僕は微笑んだ。

これから王宮の依頼を受けると思うと、まだ出発前なのに緊張感に胸が高鳴る。実家や学院で過ごした日々とはまた違う生活が僕を待っているのだ。

「当然でしょう。しかし、あなたの発明が注目されているのは確かです。今回の訪問が王国を新たな未来へ導く第一歩となることを信じていますよ」

青年の眼差しは真剣で、僕の背をそっと押してくれるようだった。

「はい。僕なりに、できることを尽くします」

僕はそう返事をした。

玄関に向かうと、そこには家族が集まっていた。

「お前なら大丈夫だ。王宮での礼節も忘れるなよ。お前の振る舞いが、シュトラウス家の評価に直

結するんだ」

父上が僕の肩を叩いた。言葉は厳しいが、目には優しさが宿っていた。

「はい、気をつけます」

まっすぐに目を見てそう返すと、今度は母上が僕の肩口の埃を払って微笑む。

「無理はしないでね。健康が一番大切なんだから」

「うん。ありがとう、母上」

そして最後に、妹のリリイが少し寂しげな目を向けてきた。

「にいちちゃん……すぐ帰ってくるよね？」

「もちろん。そんなに長くかからないと思うよ。お土産も楽しみにしてて」

頭を撫でると、リリイはこぶしをきゅっと握って笑った。

「約束だからね！」

僕は家族に見送られながら、馬車に乗り込む。屋敷が遠ざかっていく中、学院での出来事、家族との時間、そしてこれから向かう王宮のことを思い浮かべていた。

王宮で、僕は何ができるだろう？ 不安と期待が入り交じる。けれど、調査局の青年が同乗してくれていることが心強かった。

「王宮では高位の方々と顔を合わせるようになるでしょう。けれど、皆あなたに大きな期待を寄せています。どうか、自信を持ってください」
青年の言葉に、僕は小さく頷いた。



やがて馬車は王都にある王宮へと到着した。堂々たる門構えと精緻な装飾の数々は、これまで訪れたどの場所よりも壮麗で、威厳に満ちていた。

僕が案内されたのは、応接室。そこには、以前にも会った王宮魔道技術担当大臣——マクシミリアン・フォン・ヴェルトナー大臣が待っていた。

「やあ、シュトラウス殿！ 再びお会いできて嬉しい」

大柄な体を揺らしながら、ヴェルトナー大臣は笑顔で握手を求めてきた。

「ご無沙汰しております、大臣。先日は大変お世話になりました」

「こちらこそ。君の『アルカディア』の件は今でも語り草だよ」

アルカディアとは、僕が学院の友人たちと共に製作した魔道具で、四季の風景を目の前に再現できる装置だ。僕は国王の前で披露し、その発想と技術力が認められたのだった。大臣はそれを評

価し、このたび僕に声をかけてくれたようだ。

「さて、早速本題に入ろうか——今回は、君の発明力に期待しての依頼だ」

「どのような内容でしょうか？」

「戦場や王都の治安維持に使える、携帯型の魔道具を開発してほしい。すぐに展開できる『防御壁』、『暗視装置』、携帯型の補助具……いずれも、即応性と操作性が重要になる。それらは、戦場で使われるものになるからだ」

「なるほど……魔力消費や携行性とのバランスが鍵になりそうですね」

魔力消費が大きいほど、装置も大きくなりがちだが、携行性を考えると可能な限り小さくしたい。そのバランスが難しそうだ。

「製作にあたって王立魔道研究所の施設も研究員も、全て自由に使って構わない。思う存分、力を尽くしてくれ」

僕は大きく頷いた。

「ありがとうございます。全力で、取り組ませていただきます」

こうして王宮で、僕の新たな挑戦が始まった。自分の発明が、国を支え、人々の暮らしに役立つ未来のために。絶対にやり遂げてみせる……僕は固く心に誓った。

ヴェルトナー大臣の案内で、僕は王立魔道研究所の中枢へと足を踏み入れた。

白を基調とした広々とした実験棟には、最新の魔道機器が整然と並び、複数の研究員たちが忙しく作業に励んでいる。ピリツとした空気が漂う中に、魔道技術への熱量が感じられ、僕の胸は自然と高鳴った。

「ここが、君の研究室になる」

ヴェルトナー大臣が示したのは、大きな窓のある一室だった。整理整頓された作業台、魔力測定機、素材棚……そして何より、自由に使えるという設備の充実に、僕は目を見張った。

「ありがとうございます……すごい、設備が整っているんですね」

「当然だ。ここは王国でも屈指の研究機関だからな。だがここを使うからには、そのぶん結果も求められる」

言葉の端に、ほんの少しだけ圧が込められていた。きっと僕への期待の裏返しだろう。

「はい。しっかりと成果を出してみせます」

僕は気を引き締め、荷を解くとすぐにノートを広げた。まずは現状整理だ。

求められているのは、即応性・携行性・操作性。具体的には、防壁、暗視装置、補助具の製作か……そのどれもが戦場で使われるものだから、現場での素早い展開と、限られた魔力量でも効果を発揮する必要がある。

魔力消費を抑えつつ、瞬時に起動できる構造……となると、やっぱりあの仕組みを応用できるかも！

僕は以前、学院で制作した魔法風景再現装置——アルカディアの内部構造を思い出していた。あのときの魔力圧縮と拡張構造を転用すれば、小型でも一瞬で展開可能な魔力障壁が実現できるかもしれない。

「まずは……簡易防壁から、だな」

設計に取りかかると、研究所の扉がノックされ、一人の女性が入ってきた。

「あなたが、エルヴィン・シュトラウス様ですね？ 本日から開発の補助を担当させていただきます、フェリシア・グランツです」

淡い茶髪に細身のフレーム眼鏡。落ち着いた雰囲気を感じた。女性研究員だった。僕よりも年上で、言葉遣いにも柔らかさがある。

「よろしくお願ひします。僕もまだまだ勉強中なので、ご指導いただけると助かります」

「いえいえ、私は記録や補助作業が主なので。あとは、設備の扱い方など、慣れていない部分は遠慮なく聞いてくださいね」

フェリシアさんの物腰の柔らかさに、僕の緊張も少し解けた。

そこから数時間、僕は防御壁の試作に没頭した。構造は三層式の魔力圧縮結晶をベースに、起動時に外周へ展開する扇型の魔力膜を構築する。素材は軽量の銀練鋳と、魔力伝導性の高い青鉄砂を選定した。

「これで……よし、試作一号、展開開始！」

起動紋に触れると、シユウツと音を立てて結晶が光を放ち、魔力膜が前方へ半円状に展開された。だが——パァンッ！と膜の一部が弾け、火花を散らして崩れた。

「うぐっ……また、魔力負荷のバランスが……」

「大丈夫ですか？ 結晶が部分的に過負荷を起こしていますね。制御魔法陣が広すぎるのかもしれない」

フェリシアさんがすぐに駆け寄り、装置を冷却しながら的確に指摘してくれた。

「ありがとうございます。設計を少し見直します……まだ初日だし、焦らずいこう」

僕は深呼吸して、破損した装置を手に取りながら呟いた。

王宮の研究所、恵まれた設備、頼れる補佐、そして求められる成果——けれどその全てが、僕にとつて新たな試練でもあると初めて実感した瞬間だった。

僕は、この失敗で得られた手応えを前向きに捉えていた。反応速度は申し分ない。問題は制御の

精度と、魔力の伝達経路の均一性だ。

「よし、魔力圧縮層をもう一段追加してみよう。あと、魔法陣のラインを外周ではなく、中心から放射状に……」

ノートに設計を書き足しながら、僕は自分の思考をひたすら深く掘り進めていく。フェリシアさんも、その横で黙々と素材を整理し、必要な装置の調整を手伝ってくれていた。

「エルヴィン様。展開時の魔力消費を計測してみたのですが……この数値、やはりちよつと高すぎますね」

「ありがとうございます。うーん、やつぱり圧縮比が高すぎるのかな……」

ただ高性能なものを目指せばいいというわけではない。使う人間が限られるような魔道具では、王宮の要望——『誰でも使える簡便さ』——を満たせない。

「たとえば、圧縮層を素材そのもので代替することはできませんか？」

フェリシアさんの問いに、僕は手を止めて考え込んだ。

「……あ、それだ。素材に魔力伝導性と制御安定性が両立していれば、術式の構造自体を簡素化できる！」

たとえば、青鉄砂に微量の光晶石を混ぜた合金——『青晶鋼』なら、魔力の流れを整える導管の役割も果たせる。

僕は倉庫に駆け込み、候補となる素材を手にとっていく。

「これとこれ……少し加工して、試してみよう」

設計変更を施しながら、試作二号機の組み立てに取りかかる。

そして夕暮れ、再びフェリシアさんと実験をすることにした。

「魔力、防壁展開、起動」

指先に集中させた魔力を制御核へ注ぎ込むと、試作機の表面が淡く光り——静かに、だがしつかりと半円状の光の盾が展開された。

「……維持、成功。安定してる！」

「展開時間も、初回の三分の一以下です。これは……すごいです！」

フェリシアさんが記録板を握りしめ、興奮気味に声を上げた。僕はほっと息を吐き、そしてようやく安心して笑うことができた。

「やっと一步、進めたかな」

けれど、まだ完成とは言えない。実戦環境での耐久試験や、他の使用者でも扱える汎用性の確認が必要だ。

でも、それでも——この手で、ちゃんと前に進めた。それだけで今は十分だ。王宮での挑戦はまだ始まったばかり。だけど僕は、確かに一つの壁を越えた気がした。

試作二号機の成功から一夜明け、僕は王立魔道研究所の中庭で防壁の公開試験に臨んでいた。

王宮からの依頼である以上、試作品は一部の上級関係者に披露し、その有用性を示す必要がある。

芝生の広がる実験場には、ヴェルトナー大臣の他に、王国軍の副官らしき人物と、行政官の服装をした人々が数名、腕を組んで立っていた。僕は彼らの前に立ってお辞儀をした。

「お集まりいただきありがとうございます。本日は、製作した防壁の試作をご確認いただきたいと思います」

「始めてくれ。評価は実演を見てから下そう」

ヴェルトナー大臣が頷く。僕は深く息を吸い、制御核に指をかざした。

「展開、開始！」

魔力を通じた瞬間、二号機が静かに淡く光り、地面から半円状の光の壁が立ち上がる。その場にいる誰もが、息を呑んで見守っていた。

続いて実用性の確認へと移る。副官が、腰に下げた模擬剣を抜き、防壁へと打ちつける。

ガインッ！

高く澄んだ音が響き、光の壁はびくともしなかった。

「見事だな……この反応速度と耐久性。しかも、魔力の反動がない」

副官が感嘆の声を漏らし、行政官たちも何やらメモを取り始める。だが――

「ふむ。展開範囲は狭いな。防壁としては個人用に限られるだろう」

「民間利用を見据えているなら、使用者の魔力量に依存しすぎては不安が残るな」
そんな様々な角度からの意見が飛んできた。

「……ご指摘、ありがとうございます」

僕は笑顔を作って頭を下げたが、胸の奥にはわずかな痛みが走った――確かに彼らの言う通りだ。素材や術式の工夫で小型化と展開速度は実現できた。けれど、汎用性や集団利用への応用に適した仕様とは言えない。僕が理想とする『万能防壁』には、まだまだ届いていないのだ。

「よくやったな、シュトラウス殿」

ヴェルトナー大臣がぼんと肩を叩いてくれる。

「だが、ここからが本番だ。実用化に向けた改良が必要だからな。ただ、そちらの改良に移る前に、次は暗視装置を頼む」

「……はい。任せてください」

試作の成功は、単なる通過点に過ぎない。

次なる課題は、夜間戦闘や暗所での作業における視認性の確保――『魔道暗視装置』の開発だ。僕は身を引き締めた。

試験を終えた僕のそばに、フェリシアさんがそっと近づき、小さな声で言った。

「少し休憩しますか？ 中庭のベンチ、日が当たって気持ちいいですよ」

「……そうだね。ありがとう」

歩きながら空を見上げると、柔らかな日差しが射し込んでいた。

一つ目の峠は越えた。けれど、課題はまだまだ山積みだ。それでも誰かの役に立つ道具を作りたい。その気持ちがある限りきっと僕は進めると、小さな決意が僕の胸の奥で灯った。



王宮での公開試験が終わって休憩を終えると、僕は次の開発――暗視装置の設計に取りかかっていた。夜間の移動や災害時の救助活動、軍の偵察任務でも使えるような魔道具で、光源に頼らず、魔力によって視界を拡張する構造が理想だ。

「……可視領域を魔力で補充するって、本当に可能なのか？」

理論上は不可能じゃないが、魔力の感知を視覚へ変換する技術は、現代でも研究途上だ。既存の『感知型警報装置』の構造を応用すれば、あるいは――

僕が構想を練っていると、研究室の扉がノックされた。

「失礼します。こちらにエルヴィン・シュトラウス様はいらっしゃいますか？」

現れたのは、鮮やかな水色のローブをまとった、涼しげな表情の青年だった。

「……はい。僕ですが」

「初めまして。私は特別調査局直属、情報技官補のクラウス・レインハルトです。王宮にてあなたの開発を拝見し、ぜひ直接ご挨拶をと思ひまして」

整った顔立ちに、こちらを探るような目つき。そして言葉選びには品があるが、口元は軽く笑っているように見える。

「お噂はかねがね。特にアルカディアとやらの完成度には感銘を受けました」

「恐縮です。あれはまだ試作の域ですが……」

「いえ、それほど技術があれば十分でしょう。今後も王国の技術部門にお力添えいただければと、上も期待しています。エルヴィン様の働きを、これからもそばで拝見いたしますね」

つまり、監視も兼ねている——そうとも受け取れる言葉だった。

フェリシアさんが不穏な気配を察して一歩前に出る。

「この研究室は開発中の装置も多く、情報の扱いは慎重にしております。必要でしたら書類での申請を通していただけますか？」

「もちろん。今日はあくまでご挨拶がしたかったですので」

青年は軽く頭を下げて、背筋を伸ばしたまま退室していった。

「……何を考えているかわからない人だったな」

「調査局の人は、ああいう感じ多いです。王宮と現場、両方に首を突っ込むのが仕事ですから」
フェリシアさんの言葉に頷き、僕は気を引き締めた。

僕の研究は……すでにたくさんの方の注目を集めているんだ。今は目の前のことしか見えないけれど、だからこそ僕は、確かな成果を出して、いろいろなことに正面から向き合えるようにしたい。設計ノートを開いたまま、ふと視線を上げる。目の前の図面は、まだ完成には程遠い。書き直された線がいくつも交差していた。けれど、その不確かな線たちが指し示す先には、僕の理想とする未来があるに違いないと思った。



暗視装置の構想を詰める中で、僕は魔力干渉板を利用した『魔力波検出装置』の構造を参考にすることにした。

魔力の強さや動きに応じて結晶の屈折率が変わる特性——これを視覚に変換するなら、魔力を

「光」として扱うのではなく、「形」として捉えるべきだと考えた。

「つまり、見るというより『輪郭を感じ取る』道具……そんなイメージかもしれない」

フェリシアさんが首を傾げる。

「それって、実際の風景とは違って見えるってことですか？」

「うん。たぶん実際の物の存在感だけを強調するような見え方になると思う。影や色ではなく、動きと輪郭が浮かび上がるような……」

「それなら暗所に特化した機能としては、理想的かもしれませんね」

素材には、魔力に反応して透明度が変化する「暗晶板」と、変換補助を行う小型魔力回路を組み合わせる。

構造そのものは複雑ではない。問題は視覚信号への変換精度と、魔力の出力制御だ。

僕はすぐに手元の素材ボックスをあさり、以前使った結晶板の残りを取り出す。暗晶板は扱いが難しく、温度変化や魔力の揺らぎにすぐ反応してしまうため、封じ込めるケースから設計し直す必要があった。

「まずは安定フレームだな……魔力漏れを抑えつつ、内部の回路に干渉しない素材で……」

組み立て台に材料を並べ、慎重に魔力変換板を固定する。途中で一度、魔力回路が過熱して煙を上げる失敗もあった。

「……うわ、また焼けたか。やっぱり、変換速度が早すぎる……術式回路をひとつ減らして抑制フィルターを入れてみよう」

何度か微調整と修正を繰り返しながら、フェリシアさんにも補助を頼んで小型魔力回路を調整していく。

そして翌日——試作一号機が完成した。

金属製の軽量フレームに、やや青味がかかったレンズが二枚付いている。ゴーグル型の簡易装着型で、額部に魔力回路を内蔵した設計だ。

「これで、準備完了……だと思っ」

研究室の照明を落とし、魔力を流す。ゴーグルの内側にじわりと光が広がる。

……次の瞬間、闇の中に浮かび上がったのは、柵や機材の輪郭だった。影も色もない。

けれど、確かにそこに存在すると分かるように物体の外郭が、線として浮かび上がっていた。

「これは……うまくいってる？」

「すごい……！ 輪郭が見えるんですね。しかも動いているものの方がはつきりしている！」

フェリシアさんが身を乗り出しながら、僕と同じようにゴーグルを通して暗がりを見つめる。「動体感知式の感度も悪くない。あとで魔力量を変えたバージョンも作っておこうかな」

僕は思わず笑みをこぼした。手探りだった構想が、こうして形になった瞬間の喜びは何物にも代えがたいと思う。

だが、僕らが喜び合う最中、研究室の扉の外から何者かの気配を感じた。

静かに、けれど確かにノックもされていない扉の前に、誰かが立っているような気がする。フェリシアさんと視線を交わした瞬間、その気配はすつと遠ざかっていった。

「……今の、誰かいました？」

「たぶん。でも、足音がほとんどなかったですし」

「ええ、なんだか不気味ですね」

◇

その夜、僕とフェリシアさんは王立魔道研究所の裏庭で、暗視装置の実地試験を行うことにした。研究室の中では限界がある。真の性能を確認するなら、街灯も届かない、自然に包まれた本物の闇を試すしかない。

「大丈夫ですか？ 気温も下がってきましたけど……」

「うん。しっかり上着も着ているし、これくらいの冷気なら平気」

装置は改良版——視野角を広げ、物体検出の感度を調整したモデルだ。

僕はゴーグルを装着し、魔力を注ぐ。

すぐに、闇の中に淡く浮かび上がる木々と建物の輪郭。風に揺れる葉の動きまでも、まるで線画のように視界に映った。

「やっぱり……すごい。色が見えなくても、これなら移動できる」

フェリシアさんもゴーグル越しに視界を確認しながら、頷いた。

「確かに……周囲を確認しながら静かに動ける。これは探索や警備にも応用できそうですね」

僕たちはしばらくの間、静かに歩きながら観察を続けた。そして研究棟の角を曲がったとき、ふと僕は視界の隅に揺れる細い線に気づいた。

「……フェリシアさん。あそこ、見える？」

指差した先にあつたのは、建物の影に潜む人影だ。だが、その姿は輪郭が曖昧で、不規則に揺れていた。

「誰だろう……？ 研究員？」

「いや、制服の形じゃない……しかも、こっちの動きに反応していません」

僕たちは慎重に距離を詰めようとした。その瞬間、影がスツと溶けるように消えた。

「いなくなった……？」

そこには、ただ静かな夜の空気と、壁の影しか残っていなかった。けれど、確かに何かは存在していた。僕の装置がそれを捉えていた。

「……記録は残しておきましょう。視界ログも含めて」

「うん。念のため、明日ヴェルトナー大臣にも報告しよう」

暗視装置の実用化に向けて、大きな一歩は踏み出せた。でも、その夜に見えた「揺れる影」の正体は何だったのか——その答えは、まだ闇の向こうに隠れているままだった。

翌朝、僕たちは早速、昨夜の暗視装置実験の成果と、不可解な影の目撃について、ヴェルトナー大臣に報告することにした。まず開発についての報告を聞いたヴェルトナー大臣は、応接室で普段と変わらぬ穏やかな口調で言った。

「ふむ。開発は順調のようだな。暗視装置の実用化も、王都の警備や災害対応に大いに役立つだろう」

「はい。視認距離や視界の安定性など、今後さらに調整の余地はありますが……」

暗視装置の報告を終え、僕は続けて端末に記録した視界ログと、性能数値の一覧を提出した。フェリシアさんが横で、影の件について補足を加える。

「……それで昨夜、視界内に人型の輪郭が一瞬現れて、すぐに消えたんです。通常の見視では確認

できませんでした」

ヴェルトナー大臣は一瞬だけ眉をひそめたが、すぐに表情を戻す。

「警備記録の異常は報告されていないが、そのログも後で解析しよう。念のため、特別調査局に伝えておく」

淡々とした受け答え。その一言には、政治的判断の重みが含まれていた。

「何か問題が起きたら遠慮なく言ってくれ……だが、今はそちらの仕事を進めることが優先だ」

「……わかりました」

そうして部屋を辞し、廊下に出たところでフェリシアさんが小声で呟いた。

「やっぱり、あの反応……気になりますね」

「うん。装置の誤反応とも思えないし……でも今は、今できることに集中しよう」

けれど僕は、そのときすでに視線を感じていた。王宮の廊下。重厚な石壁と装飾の中に、確かに気配だけが残っている。振り返っても、そこには誰もいなかった。

「……風のせい、かな」

自分にそう言い聞かせて歩き出した。

その日から数日間、暗視装置の改良と防壁の耐久試験が進む中、誰かの足音だけが、常に背後

に残るような感覚は、薄れることはなかった。

その日、研究所に突然の来訪者が現れた。華やかなドレスに、気品ある佇まい。さらにその瞳には、誇り高さ強い意志が宿っているように見える、若い女性だった。

「……セシリア王女殿下!? 本日はどういったご用件で?」

フェリシアさんが慌てて頭を下げ、僕もすぐにそれに倣った。

「突然の訪問で驚かせてしまったかしら。わたくしはセシリア・アメリア・カレドリア。この国の第一王女です。王宮で見えからずと気になっていたの。あなたが開発している魔道具のこと」

王女の声は優しく、それでいて芯がある。場の空気を自然に掌握する力があつた。

「報告書はすでに拝見しました。暗視装置、防壁、どれも素晴らしい進展です。でも……」

王女は静かに研究室を見回す。

「実際に試す機会が必要ではないですか? 王都から少し離れた被災村や森林地帯、あるいは夜間巡回の現場……施設の中や机上では見えない問題があると思うの」

「……確かに、現場の声を拾えれば、もっと使いやすくなると思います」

僕は自然と前のめりになっていた。実際に魔道具が使用される場に赴いて試験ができるなら、ぜひ挑戦してみたい。

セシリア王女は頷き、続ける。

「王国としても、あなたの技術が人を救えると証明されれば、民間配備への後押しができるでしょう。だから——調査班を組織して、現地へ赴いてほしいの」

「僕がそんな大役を……?」

「ええ。書類や報告だけでは届かないものを、あなた自身の目で見て、耳で聞いて、感じてほしい。そして必要なら、現地で改良まで行ってもらうつもりです」

王女の言葉は、上からの命令というより彼女自身の願いのようだった。魔道具をもっと暮らしに身近なものにしたいという王女の真意が、そこにある気がした。

「……分かりました。ぜひ、やらせてください」

そう応じた僕に、王女は微笑みを向けた。

「準備が整い次第、日程を調整するわ。同行者についても、こちらで数名推薦させてもらうわね」

「はい、よろしくお願ひします」

王女が去った後、フェリシアさんがぼつりと漏らした。

「本当に、来たんですね。あの王女様が……」

「うん……でも、なんだか不思議と緊張しなかった」

「それが王女様の人柄なんでしょうね……それと、王女様に会ってエルヴィン様の顔つきも、少し変わった気がします」



顔つきが変わった？ 僕は思わず笑った。でも、確かに心の奥に少しだけ情熱の火が灯った気がしていた——信頼という目に見えない熱が、王女から僕へと確かに伝わったのだと思う。

◇

セシリア王女からの提案を受け、現地調査に向けた準備が始まった。王宮内の一室にて、僕は調査班の候補者と顔を合わせるようになった。

派遣予定地は王都南部の森林帯と、その周辺の村。地形が入り組んでおり、魔物の出現や夜間の巡回が課題となっているという。

「こちら、今回の調査班に加わる予定の者たちです」

案内役の書記官が扉を開け、三人の男女が入室してくる。

一人目は小柄な女性で、短髪に鋭い視線。軽装の上に簡易装甲をまとっていた。

「王都警備隊所属、ライナ・セルグラムです。主に夜間警備と索敵任務を担当しています」

その動きと姿勢からは、鍛え抜かれた軍人らしさが滲んでいたが、目つきに敵意や警戒心はなく、責任感の強さを感じさせた。

二人目は背の高い男性で、淡い色の外套を羽織り、手には使い込まれたメモ帳を持っている。飄々とした雰囲気。手にはメモ帳を持っている。

「民間の魔道具師、レイ・ヴィロットです。現地での観測記録と、開発支援の依頼を受けています」

物腰は柔らかく、視線は冷静だったが、それは職業柄の「分析癖」のようなものだとしてすぐにかつた。言葉遣いや態度にはどこか余裕すら感じられ、無理に距離を詰めてこない分だけ、誠実な人物だという印象を受けた。

三人目は見覚えのある人物だった。

「クラウス・レインハルト。特別調査局より、補佐と記録支援に加わります。至らぬ点多いかと存じますが、どうぞお手柔らかに」

公開試験の後に会ったときと同じ、落ち着いた声色と丁寧な所作。

意外な再会に軽い驚きもあったが、再び同じ任務に就くことになったというのは、何かの縁かもしれない。

「エルヴィン・シュトラウスです。これからよろしくお願いします」

僕がそう言って頭を下げると、ライナとレイは軽く一礼し、クラウスは柔らかく笑った。

「現地では、実際の運用に即した検証を行います。王女殿下からの信頼も厚いチームですので、協

力して任務にあたってください」

書記官の説明が終わり、地図と資料が配られる。

ライナがさっそく質問を投げかけた。

「防壁の展開速度はどのくらいですか？ 敵が間近に迫った状態でも機能しますか？」

「状況によって異なりますが、起動から展開まで約二秒以内です。一定以上の魔力量があれば、誰でも扱える設計にしております」

ライナは真剣な表情で頷いた。一方、レイは試作品の資料を流し見しながら呟いた。

「へえ……思ったよりシンプル。でも、壊れやすくない？」

「実戦での耐久はこれから試します。そのための現地調査です」

「なるほど。じゃあ、僕の出番もあるかもね」

クラウスはそれを見て微笑を浮かべたまま、言葉を挟まなかった。

顔合わせが終わり、資料をまとめて立ち上がるうとしたとき、ライナがぼつりと尋ねた。

「そういえば、王女殿下は調査には同行されませんか？」

「殿下は後日、現地の視察を予定されています」

書記官の返答に、全員が小さく頷いた。

しかし少し不思議に思ったようで、レイが軽く首を傾げた。

「ライナ、どうしてそんなことを？ 王女殿下が直に調査に同行されるのは稀なことだと思うけど……」

「この前、王女殿下自ら『気になる場所がある』って言っておられたことがあって。お伴いした会談の後だったから、てつきり同行されるのかと……」

あの王女ならやりかねない……と思わせるのがすごいところだ。そのとき、クラウドがポケットから小型の魔道端末を取り出し、ちらりと僕の方を見た。

「エルヴィン様……現地では、いろいろと想定外のこと起きるかもしれません。ですが、どんな状況でも落ち着いて対応していけるよう、我々一人ひとりが力を合わせていきましょうね」

その表情には、淡々としながらもどこか励ますような優しさがあった。

僕はその言葉に頷き返した。今日の顔合わせは、無事終えることができたみたいだった。

出発の朝——交差する想い

調査班の準備が整い、いよいよ王都を発つ日がやってきた。朝の王都はまだ他に人の気配がなく静かだったが、王宮の裏門にはすでに馬車が停まり、淡々と出発の準備が進められていた。

「おはようございます、エルヴィン様。荷の積み込みは完了しています」

フェリシアさんが声をかけてくる。彼女も今日からの調査に同行する。

「ありがとう……いよいよ、か」

そこへ思いがけない声が背後から響いた。

「エルヴィン！」

元気な男の子の声。振り返ると、学院の友人であるリヴィアとレオンが駆け寄って来る姿が見えた。その後ろには、少し控えめなカトリヌの姿も。

「遠くへ向かうのですから、きちんと見送りたい！」

商家の娘であるリヴィアは小さく肩で息をしながら言った。その声は、少し照れているようにも聞こえる。

「気をつけるよ、エルヴィン。実地調査するのは、机上の知識だけじゃ測れないことも多いからな」

剣士を目指しているレオンはどこか頼もしげに微笑む。

「現地でも、ちゃんと食べてくださいね？ それと、なるべく早く帰って来てください……あまり長く会えないのは寂しいですから」

貴族学科に進む予定のカトリーヌの言葉はいつも通り礼儀正しかった。

「……ありがとう。みんな、来てくれて嬉しいよ」

胸の奥がじんわりと温かくなる。学院生活を経て、仲間たちとの絆は確かに深まっていた。

そこへ、屋敷から家族の馬車が到着した。僕の見送りのために、辺境の領地から王都へ出向いてくれたのだ。父上と母上、そしてリリイが降り立つ。

「ふむ、旅装はまずまずだな。旅先で油断は禁物だぞ」

父上は変わらぬ厳しい声で言いながらも、どこか目尻が下がって優しい表情をしていた。

「健康には十分注意するのよ。食事も睡眠も、きちんととること」

母上は包みの中に、手作りの保存食を詰めてくれていた。

「にいちゃん、気をつけて……お土産、楽しみにしてるから！」

リリイはぎゅっと僕の手を握った。小さな手のひらが温かかった。

「リリイの手、あつたかいね」

「えへへ。にいちゃんも」

「……うん。僕は必ず、無事に戻るよ」

別れの言葉を口にする代わりに、僕は笑って応えた。

兄たちはそれぞれの任地で職務に就いており、今日の見送りには来られなかった。代わりに昨日二人から届いた手紙にはそれぞれ、無事を祈る激励の言葉が綴られていた。

僕は家族の期待も背負っているんだと思い、頑張ろうと決意を新たにした。

やがて、出発の号令がかかる。馬車に乗り込み、揺れる車内から見たのは、手を振る仲間と家族の姿だった。その景色は、音もなく胸の奥に沈んでいく。

この旅が、僕に何をもたらすのかはまだ分からない。だから、今はただ前を向いて進んでいくしかなかった。



王都の石畳を抜け、大通りを越え、遠ざかる城壁。こうして僕たちは、新たな一步を踏み出した。

王都を発ってから三日目、僕たち調査班はようやく目的地である森林地帯近くの集落へとたどり着いた。馬車に揺られ続けた体はやや重く、緊張感と好奇心が交互に押し寄せてくる。

「空気が全然違う……」

フェリシアさんが馬車の窓を少し開けて、深呼吸する。広がる風景は、王都とはまるで別世界だった。緑が濃く、風の音に混じって鳥のさえずりや、遠くで葉のこすれる音がする。

「防壁、暗視装置ともに準備完了。魔力計も点検済み」

ライナが手早く装備を確認し、レイは隣で地図をめくっていた。

「到着予定地はこの集落の奥の森に入った先。数年前に魔獣の被害が出たって記録があるな……」

「今は落ち着いているらしいですが、夜はまだ物音がするって聞きましたよ」

クラウスが笑いながら言うが、その目は相変わらず感情を読まなかった。

午後、集落に入った僕たちは村の担当責任者から簡単な説明を受け、拠点となる古い集会所を借りることになった。木造の建物は入ってみると床が軋み、古びていたが、十分な広さがあって調査の拠点としては申し分なかった。

「今日は移動で疲れているでしょう。設営が終わったら、無理せず休みましょうか」

フェリシアさんが気遣いを見せてくれた。僕たちはそれぞれ荷を解き始めた。

夜中、僕は暗視装置を手に、一人で建物の裏手に出た。日中の暖かさが嘘のように、夜の森は肌寒く静かだった。装置を起動し、視界に浮かぶ木々の輪郭を眺めていたそのとき――

「……ん？」

視界の端、森の奥に引つ掛かるような表示のゆらぎを感じた。線がほんの少しだけ揺れたのだ。

「……気のせい、じゃないよな」

森の奥には誰もいないはずだ。なのに、装置は確かに何者かの動きを捉えていた。試しに声をかけようとした瞬間、地面がぎしりと小さく沈んだ。

「……罨？」

振り返ってみると、踏み石の一つがわずかに沈んでいた。まさか……こんなところに？ 警戒心が一気に高まる。この森はただの調査地ではない。ここには何かが潜んでいる――そんな予感を感じ、夜風が冷たく僕の背を撫でた。

翌朝、僕は調査班に昨夜の違和感を共有することにした。

「暗視装置で確認したんです。森の奥に一瞬だけ線の揺れがありました。あと、足元の石が沈んで……何かの仕掛けかと」

話を聞いたライナが、表情を引き締める。

「踏み石の罠、ですか。魔獣よけか、あるいは……侵入者対策の類たぐいかもしれませんね」

レイは地図を覗き込みながら呟く。

「この辺りって、昔は盗賊団の隠れ家があったとか、そんな記録もあった気がするけど……それが関係あるかは微妙だな」

クラウドスは腕を組み、森の方角をじっと見ていた。

「とにかく、一度全員で確認に行きましょう。設置されていた場所と、暗視装置の記録を突き合わせて」

フェリシアさんの提案で、午前中はその確認作業にあてることになった。

森の入り口近く、昨日僕が違和感を覚えた地点へ向かう。

「ここです」

足元の踏み石は、確かにほんのわずかに沈み込んでいた。ライナが小型の『探査魔道具たんさまどうぐ』をかざし、魔力反応を測定する。

「微弱びじやくだけど、魔力反応が残ってる……これは魔力感知式の仕掛けかもしれません」

「外見からは分からないように加工されてるな。素人の作業じゃない」

レイが考察こうさくを述べ、みんなが考え込むように黙った。無言の時間が流れたのち、クラウドスが静か

に言った。

「調査地を選んだ段階では、この森は安全圏あんぜんけんと分類ぶんるいされていました……ですが、どうやら何者かが裏で動いていたようですね」

その目に、ほんの一瞬だけ強い警戒心が宿ったように見えた。

午後、調査範囲を広げるため、僕はフェリシアさんと一緒に集落の村長宅を訪れることにした。

年配の男性は、僕たちを見てどこかほっとした表情を浮かべる。

「よう来てくださった。実は数日前から、夜になると森の奥で音がするとあって、住人が不安がっておりましてな」

「音、ですか？」

「ええ、なんというか……金属を引きずるような、重たい音だそうです」

フェリシアさんが、さっとメモを取る。

「王都の警備隊には相談されましたか？」

「来てくれたんですが、日中は異常なし、ということ……それっきりです」

現場の警戒心の高まりと王都との温度差が、この村の空気を悪くしているように思えた。

夜になり、再び森を巡回しながら、僕はふと、ある違和感に気づいた。

「……この臭い」

風の中に混じる、鉄が焦げたような臭い。誰かが火を使った痕跡か、それとも――

「これは……焼き火じゃない。装置の焦げ跡？」

フェリシアさんが小声で言う。僕たちは互いに頷きあい、そっとその痕跡を追って歩き出した。

そして木々の陰、落ち葉の下を見ると、そこには使い込まれた魔道装置の一部が、ひっそりと埋もれていた。

「これは……誰か、こんなものを？」

現状まだ結論は出せないけれど、水面下でただならぬ事態が進行しているのではないかと僕は疑い始めていた。



翌朝、回収した魔道装置の破片を集会所に運び込み、僕とフェリシアさんは早速解析を始めた。

「この構造……見覚えがあるかも」

魔力導線の構成が、かつて王都の技術局で使われていた規格に酷似していた。

「まさか、軍用の旧型装置？　ですがこれって数年前に廃棄処分されているはずじゃ……」

フェリシアさんも眉をひそめながら、導線の破片を顕微鏡で観察する。

「これ、魔力拡散型の『起動石』ですね。本来なら野外設置型の障害物感知装置に使われるのですが……」

僕は昨夜感じた焦げた匂いを思い出す。

「この用途、置かれていた場所、そしてこの前に発見したゆらぎ……これは推測ですが、誰かが森に旧型装置を持ち込み、障害物感知のテストをしていたのではないのでしょうか？」

そこに、村の周辺をさらに調べていたライナとレイが戻ってきた。

「エルヴィン、ちょっと来てくれ。森の北側、川沿いで……こんなもんを見つけた」

レイから差し出されたのは、金属片に小さな紋章が刻まれたプレートだった。

「これ……王国の軍需工場の刻印ですか？」

「ただの鉄屑じゃなかったみたいだな」

クラウスも後ろから歩いてきて、しばらく無言でそれを見つめていた。

「少なくとも、この森で王国の旧装置を再利用する実験が行われていたのは確かみたいです。しかもそれは、王都付近では表に出ていきたくない代物……」

ひやりとした空気が流れ、辺りが静寂に包まれる。

その夜、調査報告の整理中、フェリシアさんのカリカリと記すペンの音が止まった。

「エルヴィン様、これ……昨日の魔道装置の記録と、今朝の風向きの変化、あと夜間の動物の行動パターンを重ねたものです」

フェリシアさんが差し出した地図を見ると、三つのパターンが思いがけない一致を示していることに気がついた。

「ある一点だけ何も無い地点がある……」

森の北西部、地図上には何も記されていない「空白地帯」。そこが、僕らが発見した異常の発生地点なのかもしれない。

「明日、確認に行こう」

僕がそう言った瞬間、集会所の窓の外から、ばきりと枝の折れる音が響いた。

みんなが一斉に顔を上げる。静寂の中に、また気配が戻ってきていた。今回は、目の前の調査よりも、ずっと近い距離に。



翌朝、調査班全員で北西の「空白地帯」へと足を踏み入れた。森を進むと、木々の間にぼつかり

と開けた広場のような空間が現れた。周囲には人工物の痕跡は見当たらないが、地面には踏みならされた跡、焼けた枝、そして……

「これ……小規模の結界痕？」

ライナが警戒しながら指差す。

「魔力の残滓^{ざんし}がかすかに残ってる。しかもこれ、遮断型^{しやだんがた}じゃなく、逆に魔力を『通す』系だ」

誰かがここで、魔力を外へ流すような実験をしていたのか？ その方向は……「ゼクトス帝国^{ていこく}」との国境に近い西側だ。

ゼクトス帝国は、長年敵対している軍事大国だ。その帝国が今回の事件の背後にいるというのか。「誰かが通信か、あるいは転送系の魔道具を使つた可能性があるね。もし帝国との間で秘密裏に情報が送信されていたとしたら、事態は思ったより厄介だよ」

レイの言葉に、僕の背中にひやりとしたものが走った。もしかすると……ただの装置の残骸^{ざんがい}じゃなかったのか。今もこの森を、誰かが利用しているのかもしれない。

痕跡^{こんし}を記録し、僕たちは拠点^{きょてん}に戻った。

午後、フェリシアさんと今後の行動について話し合う。

「これ以上、この村に留まり続けるのは危険かもしれません。王都へ報告して私たちは別の場所へ

「移りませんか？」

「うん。この村での検証も済んだことだし、次の拠点へ移ろう」

僕は地図を広げ、王都周辺の調査拠点を確認する。

「……この南東のアーヴェルト村。石造りの建物が多い村で、鍛冶職人が多く暮らしているらしいんです。魔道具に使えるような工具や素材も手に入るかもしれない」

フェリシアさんが頷く。

「確か、その村の鍛冶師たちは現場に合わせた装備や道具作りに長けていると聞きました」

「そうなんだね。その技術を用いて、僕らの力になってくれるかもしれない」

「あるいは、北西の山岳地帯にあるアルヴィス村です。寒冷地でも生活が維持できる特別な加工技術を持つ鍛冶職人の村だそうできて、寒冷地向けの装備や素材加工の点で、参考になることが多いはずです。あの村の職人は、王都の技術局でも注目されていましたから」

フェリシアさんが地図を指しながら言った。

「その村の知見が加われば、今の調査にも別の角度が生まれるかもしれませんね」

こうして、僕らは調査の第一段階をこの森で終え、次はアーヴェルト村へ向かうことになった。状況次第で、さらにアルヴィス村を目指す新たなルートが決まった。

夜、最後の荷造りを終えた僕は、集会所の裏手から森の方を見やった。あの「空白地帯」は、静かに風に揺れていた。まるで何事もなかったかのよう。

けれど、その沈黙こそが何かを隠している——そう感じていた。

「行こう。ここに答えがなかったとしても……その先に繋がる道は、きっとある」
誰に聞かせるでもなく、そう口にした声が、夜の空気に吸い込まれていった。

到着！アーヴェルト村

数日間の移動を経て、僕たちはアーヴェルト村に到着した。

森の南東に位置するその村は、緩やかな丘陵に沿って石造りの家々が並ぶ、静かな田園地帯だった。麦畑が風に揺れ、陽光が屋根の瓦を照らしている。王都や前の森とは違った、穏やかな風景。

「ここがアーヴェルト……ずいぶんと、のどかな場所ですね」

フェリシアさんがそう言っただけで微笑む。

「でも鍛冶師の村らしく、鍛造音は絶えませぬね」

ライナが遠くの工房を見ながら呟いた。確かに、村の一角では鉄を打つ音が断続的に響いている。とはいえ、どこか柔らかいリズムだった。

「この村では、実用的な装備や道具の開発が盛んです。防壁や暗視装置の応用テストにも協力してもらえそうですね」

フェリシアさんの言葉に頷く。集落の中心部に入ると、僕たちは村の集会所に案内された。村長との挨拶を終え、拠点となる家屋を借りることが決まる。荷解きを終えると、早速僕らは村の様子

を視察しに行った。

僕は村を散策する途中で、人々が集まる広場を訪れた。そこでは大柄な若者が、巨大な金床を一人で運んでいるのが見えた。

「おおっと……そっちじゃ重心崩れるぞ。持ち方はこうだ」

後ろから年配の職人が声をかけると、彼は屈託のない笑みを浮かべて頷き、姿勢をただす。

筋骨隆々の体躯に、短く整えられたダークブラウンの髪、そして深い琥珀色の瞳。見るからに、豪快さを感じさせる雰囲気だった。

「すごい……あんなサイズのコイルを、軽々と……」

「鍛冶場の看板息子らしいわよ。名前は確か……ガルドとか」

隣にいた村の案内役の少女が、ぼつりと呟いた。

……あの人が、この村の中心で働いている職人の一人なんだな。

そのとき、その若者と目が合った。彼はこちらに向かって手を挙げてきた。

「おーい、よそ者か？ 魔道具担いでるってことは、例の調査の連中だな！」

豪快な声が広場に響き渡り、僕らも思わず笑みがこぼれた。

「ええ、王都から地方視察に来ました。エルヴィンと申します」

「俺はここで鍛冶師をやってるガルドだ。今は忙しいから、明日にでも俺たちの鍛冶場に来い。いももん見せてやるからさ」

威勢の良い彼の言葉を聞いて、彼はどんなものを作るのだろうと興味が湧いてきた。

「あれ、なんだか変な臭いがしませんか？ 焦げたような感じの」

クラウスが異変を察知したように辺りを見回す。ライナもそれに賛同した。

「言われてみれば確かに、煙のような臭いがします」

「ここでは金属の加工をやっているから当然じゃないか。今日は長距離の移動で疲れたし、休もう」

レイの提案に、僕も「そうだね」と賛同する。明日からの作業に取りかかるためにも、今のうちから準備しなくてはと、僕らはその場を後にした。

◇

翌朝、僕はフェリシアさんと共に村の鍛冶場を訪れた。

昨日広場で見かけた若者——ガルドが、すでに火炉の前で鉄を打っていた。朝の冷気をもととせず、上半身から湯気を立ち上らせ、作業をしている。彼はまるで鉄そのものと会話しているかの

ようだった。

「お、来たな。王都からの『ひよろっこい発明家さん』ってのはあんたか？」

大斧の柄を脇に置き、豪快に笑う。「ひよろっこい発明家さん」と呼ばれていることにはちよつと驚きだったけど、苦笑いしながら挨拶を返す。

「エルヴィン・シュトラウスです。魔道具の開発と現地試験のために、この村に——」

「かしまった挨拶はいい。お前がどんな奴かは見てりやいつか分かるだろ」

ガルドは鉄片を火に戻すと、手早く柄の加工に取りかかりながら続けた。

「昨日、お前らが運んでた箱と装置、あれ全部『防御展開式』だろ？ けど、肝心なときに展開が遅れたら意味ねえんだ。俺の村じゃ、展開が遅いと魔物にすぐ壊される」

「……確かに、展開速度は改善すべき課題です。でも、どうしても一定の強度を保ったまま加工するというのは難しいんです」

「なら、鉄と話せ。お前は材質を理解してから加工しているか？ なんでも自分の思い描いた通りに加工しようと、無茶なことをしているんじゃないだろうな。最初に動き出すのはいつもこっちじゃねえ。材料がどうしたいか先に語ってる」

彼の言葉は荒削りだが、芯にある技術観は確かに伝わってきた。

「材質の意思を汲み取れということですか？」

立ち読みサンプル
はここまで

「そうだ。俺も村の年長者たちに比べればまだまだだけだな」

「じゃあ、これ——ぜひ見てもらえますか？」

僕は防壁の小型試作型を取り出し、展開と収納を一通り見せる。ガルドは興味深そうに近寄り、無造作に装置の縁を叩いた。

「……ふむ。悪くない。けど、これじゃ強く落下したときに壊れるな。軸受けが浅い。加工の『逃げ』が足りねえ」

彼の指摘は、まさに実地で使われる場面を想定した鋭い視点だった。

「良けりゃ、試作の補強、俺のところで手伝ってやってもいい。どうせ手が空いてたところだしな」

「本当ですか？」

「おう。見返りは、俺の弟子たちに『本物の魔道具つてやつ』を見せてやること。わりと地に足を着けず夢見てる奴が多いんだ」

この村の鍛冶場が、単なる労働の場所じゃなく、次代に技術をつなぐ「学びの場」にもなっていることを感じた。僕も学べるものは学び取ろうと決心した。

その日の午後、僕たちは簡易工房を借りて作業を始めた。

ガルドの手際は見事で、あらゆる道具の扱いが理にかなっていた。僕の改良案にも率直に意見を

出してくれる。時折、ガンガンと火花が飛ぶ中で、彼が笑いながら言った。

「お前、見た目と違って芯は強えな。鉄に好かれる奴つてのは、大体そうだ」

ただの言葉なのに、こんなにも背中を押されるなんて……ガルドに言われると不思議と嬉しくなり、その後も僕は一心不乱に技術を磨いた。

夜、作業を終えて鍛冶場を出ると、村の東側にある森に、妙な灯りが見えた。

「……あれは？」

「村人じゃねえな。今夜は誰も、あつちに入つてねえはずだ」

ガルドが眉をひそめる。小さく揺れる灯りの正体は分からない。

だが、その「ゆらぎ」はただの炎ではなく、どこか意志のようなものを孕んでいるように見えた。灯りが揺れていた方向は、村の境界を越えた、鬱蒼とした森の奥だ。

「あれ……見間違いない、よね」

僕がそう呟くと、隣に立っていたガルドが険しい表情で頷いた。

「今夜は誰も森には入つてねえ。あの辺りは獣避けの結界も張つてあるしな」

「まさか……誰かが、すり抜けたのか。それとも、壊した……？」

「どっちにしろ、放っておくわけにはいかねえな。行くか？」